

## 「母教会に招かれて」

2016年11月10日

高校三年生の時に私が洗礼を受けた大分県の杵築教会は創立125周年を迎え、創立記念礼拝の説教に招かれた。説教する幸いを感謝した。杵築教会は125年の長い伝統を持つが、私が通ったのは1年半くらいであった。その時に、吉新治夫牧師と出会い、信仰を導かれた。教会員の方々も「秋吉君、秋吉君」と呼んで、可愛がり、信仰を育ててくださった。生きる意味と希望を失っていた私は、天地を作られた全能の神を知り、主イエスの愛を知った。生きることに向かって、立ち上がり、その喜びを伝える伝道者の道に進もうと決心した。杵築教会は私の人生の出発になった。この日は、11月の第一主日で、「永眠者記念礼拝」でもあった。125年間、教会を支えてきた方々の遺影を並べ、記念する礼拝を捧げた。恩師・吉新牧師は50数年間、杵築教会一筋に仕え、20数名の教会員で、町のランドマークにもなるような教会堂を建てた。ステンドグラスのある明るい教会で、パイプオルガン、カリオンも設置している。蔵書の多さに圧倒される。キリスト教文化の拠点となるような教会である。私は杵築教会を離れて半世紀以上も経っていて、知らない人もおられたが、懐かしい方々にもお会いし、嬉しかった。

「風はやみ、凧になった」と題し、マルコ福音書4章35節～41節のガリラヤ湖の嵐を静めた奇跡から説教をした。主イエスと弟子たちを乗せた舟は嵐に遭遇し、舟は波をかぶり、水浸しになった。弟子たちは必死で舟を漕ぎ、岸边に寄せようとしたが、主イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちは非常に恐れて「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と叫んだ。この叫びはおかしい。彼らはガリラヤ湖の漁師で、湖については知り尽くし、嵐にも幾度か遭遇しただろう。主イエスはナザレの大工の子で、嵐に対処する術を知らない。弟子たちの力で嵐を乗り越えなければならないのに、溺れても構わないのかと主イエスに責任があるかのように言っている。この言葉は下記のような背景があるのではないか。マルコ福音書が書かれた数年前、ローマのネロ皇帝はクリスチャンに大迫害を加えた。ペトロをはじめ、パウロ、使徒たちや、多くの信者たちは無残な殉教死を遂げた。この時、教会は神を信じ、福音に従って生きているのに、神様は助けてくださらない、私たちが殺されても構わないのか、平気なのかと祈った。だから、舟は教会を、嵐は迫害の嵐を象徴しているのであろう。助けもなく沈黙している神に対して叫んだのである。主イエスは「黙れ、静まれ」と宣言された。すると、風はやみ、凧になった。主イエスは嵐を、混沌とした不条理を制せられる権能を持つ神の子である。この主イエスがあなたと共にいて、嵐を凧に変えてくださるというメッセージである。私だけがなぜ、このような悲しみに遭うのか、私の家族がなぜ、このような悲劇に見舞われるのかと苦しみ、神を見失う。しかし、主イエスは「黙れ、静まれ」と宣言し、静まった凧を進めるようにしてくださる。私はしばしば、そのような恵みに与って来た。主イエスのなさった奇跡は昔あった不思議ではなく、今の私たちに起こっている奇跡である。教会生活はその奇跡を追体験していく場なのである。

杵築教会も長い125年の間に、嵐に遭遇し行き詰ったことも幾度かあったでしょう。今日、記念する信仰の先輩方は嵐を乗り越える戦いをしてこられた。先輩方に倣い、嵐を静め、凧にしてくださる主イエスを信じ、歩み続けていく。神は、その信仰を必ず顧みて、教会という舟を前に進めてくださる。主イエスが乗ってくださっている教会に私たちも乗船していることを喜び合いたいと勧めた。